パラドクスの論理

――『メノン』篇における知識の問題

上田　徹

『メノン』篇は、初期から中期へのプラトンの知識論の在り方を見る上でさまざまな問題を提起する対話篇である。ここでは特に、探求のパラドクスの解釈について、もっとも徹底した解釈を行っているホワイトの見解を参考にしながら、そこでのプラトンの意図を探ってみたい。私は、探求のパラドクスはホワイトのいう「探求の対象の同定」に関わる問題ではないと考えている。パラドクスの提出は、プラトン自身が初期対話篇でとっていた方法に関わる問題点をもっとも明白な形で示すためであった。しかしそれはホワイトのいうようにプラトン自身の問題点だったのではなく、プラトンに敵対するひとつの立場――ソフィスト――の論理のもつ問題点なのである。

Ⅰ　ホワイトによる探求のパラドクスの解釈

まず対話篇のなかで、いわゆる探求のパラドクスがどのように語られているか、ということからみていこう。探求のパラドクスは、メノンとソクラテスのふたつのversionによって語られている。

(1)メノン「そうすると、ソクラテス、それは何であるかということをあなたが全然知らないのだとしたら、あなたはどんなやり方でそれを探求するおつもりですか。というのも、（M１）あなたは知らないものをかかげて、どうやって探求できるのだというのですか。（M２）かりにもし、それに出会う機会があったにせよ、どうしてそれだとわかるのでしょう。それをあなたは知らなかったのですから。」（80d5～8）

(2)ソクラテス「君がどんなことを言おうとしているかがわかったよ、メノン。君は承知の上で、まるで争論の議論のようにそれを引っ張り出してきたのかい。その議論というのはこうだ。ひとは知っていることも知らないことも探求できない。なぜなら、（S１）知っていることは知っているから探求しないだろうし、（S２）知らないことは、探求しようとするものを知らないから探求の必要がないというのだ。」（80e1～5）

この箇所について、はじめに、ホワイトの解釈をとりあげ、その意味を考えてみたい。ホワイトは、(1)と(2)のversionには相違点は

ないと考え、とくに(1)のM2が、探求の対象を探求者がそれとして同定（再認）するさいに生じるパラドクスをあらわしているという。[1] ホワイトによれば、探求（inquiry）とは、探求者がその対象について、ある「不完全記述」（specification）[2]をあらかじめ所有しながら、対象を知覚領域（ken）にもたらすことを目的として行う過程である、とされている。しかし、ここで探求をこのように規定すると問題が生じると彼はいう。その問題とは、いったいどのようにして、探求者が所有している不完全記述（探求の対象についての不完全な情報）は当の対象の正しい記述であると知られるのか、ということに関わるものである。すなわち、それを正当化するには、対象そのものを観察して得られる対象の完全な記述との照合によるほかない。しかし対象を発見するには手がかりとなる正しい不完全記述がまえもって必要である。ここにジレンマが生ずる。探求という過程の方向を定める不完全記述は、まえもって探求者に知られていなければならないから、その記述は探求の対象から正当化を受けることはできない。よって、ホワイトによれば、探求という過程には絶えず不確定性（indeterminacy）が入りこむというのである。

ホワイトは、プラトンの関心が「エイドスという対象に向けての探求」[3]にあると考え、プラトン自身が探求にこのような難点があることを指摘したものがさきにみた探求のパラドクスであるといっている。彼の主張によると、プラトンの考えていた探求は、エイドスを知覚領域（あるいはそれに類似した完全記述を与えうる状況）へもたらすことで完遂する過程であったが、プラトンは、初期対話篇のなかで、エイドスを見ることによってその対象についての定義を述べることができるのか、定義を述べていくからその結果エイドスを見ることができるのかということについてはっきりした考えをもっていなかったという。そこで、プラトンは、この問題点を『メノン』篇で解決しようと考え、まず問題を探求のパラドクスという形で定式化し、想起説を解決策として与えたのだ、と彼は考えるのである。

ホワイトによると、プラトンの想起説は、探求者がもたねばならない不完全記述をプラトンなりの仕方で与えたものであり、その結果遭遇する対象の正当性も同時に保証したものということになるだろう。しかし、ホワイトは、想起される知もやはり不完全であり、知識には至らないのだと主張し、プラトンと袂を分かっている。ホワイトのプラトンへの反論は、想起される知も、探求と同じ形式をとり、不完全な記述を手がかりにして想起されねばならないから、想起された探求の対象が本当に正しく想起されているかについては不確定である、ということである。それに対して、いや、探求の場合は対象の同定について不確定さがあるが、想起はぴったりと対象を捉えるのだ、とプラトンを弁護するひとにはホワイトはこう答える――想起だけはつねに正しく行われるとすれば、そもそもパラドスによって、プラトンが探求のさいの正当化の疑問を与えたことが無意味になる。プラトンの想起説でのパラドクスの解決に何かの意味があるとすれば、想起もまたパラドクスにさらされなければならない、と。

このホワイトの議論は、それなりに説得力をもつ。しかし、彼はそもそもパラドクスの意味づけで誤りを犯しており、それで想起説

についても見誤ってしまったのだ、と私は思う。このことは、彼がパラドクスをメノンのversionの一部だけ（M2）に限り、残りを切り捨ててしまっていることでもわかる。対話篇全体のなかで、パラドクスを意味づければ、残りの部分、特にソクラテスのversionとメノンのそれとの関係を無視することはできないはずである。ホワイトでは把握されていないパラドクスの背景を明らかにするために、パラドクスの導入状況を振り返ることにしたい。

Ⅱ　パラドクスの導入状況

『メノン』篇は、明らかに初期対話篇のもつ形式を踏襲し、それを拡大しようとする意図を持っている。ベンソンは初期対話篇の形式について、一般的な主題を「対話者のもつ誤った臆見の除去」とし、特徴を四つあげている。[4]

(a)行われる対話の主題となる問いの提示
(b)対話者が「知っている」と臆断している誤った臆見の提示
(c)対話者が提示した答えと矛盾する命題を対話者自身から導きだし、対話者の主張を論駁すること
(d)対話者の誤った臆見を除去することを頂点にして結論はアポリアーになること

以上の(a)～(d)の特徴が大きく

1．誤った臆見の提示
2．その論駁とアポリアー

として二段階にまとめられるとすれば、『メノン』篇ではさらにその後の二段階を加えることが意図されている。それらは、

3．正しい臆見の喚起
4．知識の獲得

である。ただし実際に対話篇のうちで描かれるのは召使いの子による実験で示されている第三段階までであり、第四段階はその子が到達する未来の状態として可能性の示唆にとどめられている。[5]この構成で見れば、探求のパラドクスがおかれるのは、「徳は教えうるか」というメノンの問いを「徳とは何であるか」という問いになおし、初期対話篇のもつ(a)～(d)の特徴を備えた対話を行っているはじめの二段階の直後である。この位置は、プラトンが初期対話篇の形式をたどったのち、『メノン』篇そのものの意図に移ろうとする転換点である。ここから、プラトンはこの位置にパラドクスをおき、初期対話篇で描かれているソクラテスの論駁から生じる難問としてこのパラドクスを扱っている、と考えられる。このことは、パラドクスの導入状況で、初期対話篇に見られるソクラテスの論駁の二大原則がどのように現れているかを見れば、より明らかになるだろう。それらの原則とは、以下の二つである。

α．定義の優先権の原則（priority of definition）（以下ＰＤと略記）[6]

β．対話者は必ず自分が真だとすることを答える義務をもつという原則（"say what you believe" constraint）（以下ＳＷと略記）[7]

ＰＤとＳＷは、ともにソクラテスが論駁を行うための必要不可欠の原則である。『メノン』篇のパラドクスに至るまでの部分は初期対話篇の構成をもつばかりでなく、ＰＤとＳＷの両方の原則が相互補完的に機能することを積極的に主張しているとみることができ

る。特に注目されるのは、ＰＤが要求される場合、それに伏在する形でＳＷも要求されていることである。ソクラテスはメノンに以下のようにＰＤを要求している。

「僕がそれが何であるかを知らないものについて、どうしたらどんなふうのものであるかを知ることができるだろうか。それとも君には、メノンが何者であるかを全然知らない人が、メノンは美しいか、金持ちであるか、品のいい人か、あるいはその反対であるかを知ることができると思うかね。」（71b3～7）

「徳についても全く同様なのだ。たとえ徳というものが、さまざまな種類をもち、数多くあるにせよ、すべては、それによって徳であるようなあるひとつのエイドスをもっているのである。答え手としてはこのエイドスに目を据えて、まさに徳であるところのものを問い手に明らかにしてやるのがうまいやり方といえはしまいか。」（72c6～d1）

ソクラテスの定義の要求が「何であるか」（ti estin;）という問いであれば、先の例はti/poionの区別、つまり「何であるか」と「どのようであるか」の区別を明白な形で導入している。ホワイトは、ここにパラドクスと同様の意味を読み込んでおり、この区別は、tiをpoionより先に知らなければならないのに、tiを特定する情報はpoionの形をとらざる得ないというジレンマの始まりであり、のちにパラドクスとなる難点の萌芽であるとして解釈するのである。[8] そのように考えると、確かに彼の言う通り、後の例で要求されている「エイドスへの注目」は、tiによって問われるべき探求の対象を先取りしてしまっているように読める。彼が定義の発見と対象であるエイドスの発見との混同をプラトンに帰したのはここからであろう。だが、彼が言う通り、パラドクスの背景にはこれらの例が不整合さをもっているということが関係しているのであろうか。

私にはそうは思われない。具体的な対話の状況を描いている初期対話篇においては、ＰＤはＳＷと結びついて要求されていることを忘れてはならない。ソクラテスの「何であるか」という問いは、ＳＷと結びつくことによって、「知っている」と主張する答え手にその「知っている」ということを言語化させようという問いである。いいかえれば「答え手にとって何であるか」という問いである。[9] 答え手が定義を要求されている事柄を知っていると主張し、それを言葉で述べることができるというとき、答え手が問い手を欺こうと意図していないかぎり、答え手は言語をそれとして用いている同一の事態を把握していなければならない。少なくとも、その事態が同一ではなく、異なりとして現れてくるのであれば、ＳＷによって真実を答えるように要求されている答え手は言語化を断念し、知っているという主張を撤回しなければならない。ソクラテスは、形の定義をメノンに求め、以下のように言っている。

「いつも我々は多くのものに行き当たってしまうのだ――僕にはこういうふうに言わないでくれ。君はそれらがたとえ反対のものである場合でも、それら多くのものをあるひとつの名前で呼び、それらの一つも形でないものはないといっているのだから、直線と円とを同じように含んでいるそのものとはいったい何だろう。それとはつまり、君が形と名づけ、円も直線も形であるというときに君が意味していることだ。」（74d4～e2）

「エイドスへの注目」に関していえば、それは、ＰＤの要求が「知っている」という答え手に向けられる以上、言語化する以前にその事柄がひとつのエイドスとして答え手に現れていなければならないということに基づいている。ソクラテスは、この「知っている」という臆断を足掛かりにして論駁を進める。論駁の結果、もし答え手のうちに同一のエイドスが把握されていない場合には、ソクラテスは、定義を求められている名辞のもつ同一性を根拠にして言語化の不備を指摘し、異なった現われを同一だと偽ったとしてＳＷによって答え手を非難する。そして答え手は、ＳＷに従う限り、また、「知っている」という主張を撤回しない限り、別の言語化（定義の提出）を行う義務をソクラテスに負うことになる。

ＳＷとＰＤが相互補完的に機能している例を、『メノン』篇からもうひとつとりあげてみよう。それは前の例に続く箇所にある。ソクラテスは、形の定義を与えてみよといわれて行き詰まったメノンにかわって「形とはもののなかでただ一ついつも色に随伴しているものである」（75b10～11）という手本を示し、「僕は君がもし徳というものをこういう仕方で答えてくれれば満足だ」（75b11～c1）という。しかしメノンは、この定義は間抜けである、もし問い手が色というものを知らないと主張したらその答えは無意味だ、といってソクラテスの定義にけちをつける。それに対してソクラテスは争論術との明確な対比をしながら、次のように答えている。

「僕は正しい答を言ったと思う。ここでもし問い手が争論と競い合いを好むような知者たちの一人であったら、僕はそのひとに言うだろう。『僕はもう言うことがない。もし僕が正しく語っていないというなら、説明を要求して論駁を始めるのが君の役目だ』と。でもいまの僕と君のように、友達として互いに対話をしようと望むのなら、何とかして、もっと穏やかに、上手な議論の仕方で答えなければならない。そのうまいやり方とは、たぶん、ただ正しいことを答えるだけでなく、問い手がそれに加えて知っていると認めるようなことを使って答えるということだ。」（75c8～d7）

ti/poion の区別を対話の状況から切り離して論理的に遮断する解釈では、ここでソクラテスが徳の定義の手本として述べている色の定義をどう扱ったらよいかわからなくなる。ブラックはこの箇所について、ソクラテスの「何であるか」の問いは ousia との面識（acquaintance）を要求するものであるが、エイドスそのものは言語化不可能であるから、対話者が定義（logos）によって、自分とエイドスとの面識を保証する徴表（distinguishing mark）を与えることができれば満足された、といっている。[10] しかしそうするとＰＤで要求されているのは ti であり poion ではないという大前提が損なわれてしまう。ブラックは ti の答えをエイドスとの面識に限り、その厳密さを守っていると考えているが、言語化不可能のエイドスとその徴表になっているという logos の関係について、ホワイトのいう不確定さが生じるのは避けられない。

この箇所もやはり、ＰＤとＳＷの相互補完性から理解するべきであろう。この例は、特にＰＤの背後でＳＷが強く機能したケースであると考えられる。ＰＤとＳＷのはたらきをここで確認してみよう。

(1)ＰＤの要求によって

①対話者の「知っている」という主張が真である

②「知っている」ことの言語化が可能である

という①と②では②が優先的に検証されねばならない

(2)ＳＷの要求によって①と②の真理性は論理的に同値であると対話者に承認される

(1)でＰＤを要求するソクラテスは、①を主張するメノンを②の側面から吟味する。しかしＰＤだけではまだ①と②の論理的関係が明白ではない。例えば論駁に追い詰められた対話者が、「私がそれを知っていることは真だが、それは言葉では表せないことなのだ」と主張する場合がある。このとき対話者は①と②を論理的に独立な事柄であるとみなそうとしている。ソクラテスがＰＤを要求する場合、①と②の同値関係は無論前提されている。しかし②から論駁を受け、①の主張に固執する対話者には、ＰＤは、①より②を先に検証せよという約束にすぎず、両者の真理性の同値関係には関与していないと考えるほうが都合がよいのである。

そこで(2)のＳＷの要求が重要になる。ＳＷは“say what you believe”という義務を対話者に課し、対話者が②で論駁されて不当に①に固執するときにも、①と②の遮断を阻止し、「言語化できない→『知っている』という主張は偽である」という同値関係を保持するのである。

だが、しかし、ＳＷにも対話者の恣意的な解釈を許容する危険は残っている。それは、対話者が“say what you believe”の“you”に過度に力点をおき、ＳＷを①と②の同値関係をつなぎ止める要求としてではなく、遮断した①を正当化する「私的な領域」への承認として受けとった場合である。このとき、対話者は「知っている」という主張が無条件に真であると臆断し、②において言語化の不備が指摘されてもそれを認めないだろう。事態はソフィスト的な全知の僭称に類似したものになる。

75c8～d7でソクラテスが注意を与えているのは、答え手が与えた答えを問い手が知らないといっても、答え手はそれを突っ撥ねてしまい、新たな定義を示さない例についてである。さきの図式では、②で言語化の不備が指摘されても、①の「知っている」という主張に固執する場合がそれにあたる。注意のなかで、ソクラテスはこの場合に対して、ＳＷの要求を“say what *we know*”に強め、①と②を論理的に遮断する「争論術」(eristikos logos)の論理に対抗している。「知っている」という答え手の主張はＰＤとＳＷを満足するかたちで検証されねばならない。ソクラテスはそのことへの注意をここで語っているのだ。

そう考えると、この箇所からブラックのように、logical な意味での ti/poion の区別を読みとるより、ここはそれが dialectical な意味内容をもっていることを示している箇所だとみたほうが対話篇のコンテクストにもあうだろう（ソクラテスによる dialektikōteron 75d4という表現）。ブラックらにみられる本質主義解釈[11]は、ti の問いに対応する対象を指向するが、ＰＤは答え手のうちにおける知の在り方を dialectical に明るみに引き出すものである。定義が得られたかどうかの了解は、この知の在り方が検証されたかどうかに関わっている。したがって、問い手が答え手と共通の把握を行えれば、そこで定義は終わるのである。

このように、パラドクスの導入状況で、プラトンは対話と論駁に

関わる原則を初期対話篇のモデルを用いて明らかにしている。そのなかでもとくに、ＰＤとＳＷの相互補完性は重要である。対話者が「知っている」という主張を自らなし、自認しているとき、ＳＷはその主張を自分で正当化するように義務づける。ソクラテスと対話をはじめたが最後、対話者は、「知っている」という主張が正しいことを自分で立証してみせるか、主張を撤回し、無知を認めるまでソクラテスのもとを離れることはできないのである！

しかし、より狡猾な対話者にあっては、ＰＤとＳＷの要求にしたがっているかのように見せ、実際はその原則を不法に占拠し、対話を破綻させる論理を用いる場合があった。プラトンは、ソクラテスにそれを争論術としてふれさせている。これはプラトンがパラドクスの導入に張った伏線である。パラドクスは、まさしくその論理を、反語として表明したものだからである。

Ⅲ　パラドクスの解釈

ソクラテスの論駁は、対話者が自分の主張を撤回し、無知を承認するまで逃さない。初期対話篇では、この承認は対話篇の終わりである。しかし『メノン』篇では、そこからさきの二段階が描かれねばならない。そのためには、無知の承認は、知らないということを知り、そこからふたたび問答がはじまる不知の承認に転換しなければならない。

プラトンは、パラドクスによって、無知の承認がそのまま問答の不可能になるという、いわば、知そのものについての強力な臆見を明確にし、排除することを意図している。その「臆見」とは、すでにふれられている争論術の論理が基づくものなのである。この論理の危険性は、ソクラテスの論駁の原則であるＰＤ、ＳＷの要求を、内側から腐敗させてしまうことにあるのだ。

このことは、争論術の論理が、Ⅱで明らかにしたＰＤの構造に、擬似的な構造をとってあらわれてくることに示される。いま、あらたにその図式を示してみよう。

(a)「知っている」という主張
　　＝
(b)（内的確信としての私的な知の所有）
　　＝
(c)「知っていること」の言語化の可能

(b)は、さきにも指摘したように、ＳＷの"you"の不当な拡張から生じる。ソクラテスの論駁は、(c)の言語の領域から、(b)を突き崩し、(a)を撤回させる。だが、そこで、もし(b)が無条件的に絶対化され、(a)と(c)を恣意的に正当化したらどうなるだろうか。(a)と(c)の同値性が破壊され、言語もアト・ランダムに使用されることになるだろう。そうなると、論駁のための不動の点はどこにも残されていない。争論術は、この図式を用いることによって、答え手のうちでの「知っている」ということを故意に覆ってしまったまま放置し、特権的に言語を操ることを許すものである。プラトンは『エウテュデモス』篇でその様子を描いている。

詭弁を弄するソフィスト、エウテュデモスは、人は同一のものであり、かつないということはできない、だから人は、知者であると

同時に無知者であることはできないといい、自分はあることについて知っているからあらゆるものについて知っていると主張する。そしてその真偽を確かめようとしたソクラテスの問いに対し、何を問われても「知っている」と答えるばかりでそれ以上のことをいわない（cf. *Euthyd.* 293b1～295a9）。争論術による言語のやり取りは、(a)と(c)を遮断したところに成立する。つまり、エウテュデモスの詭弁は、自分のうちにおける「知っている」ということを故意に絶対化し、そこに対話者の言葉を寄せ付けない牙城を築き、立て籠もるものである。

さて、以上のことは、どのようにパラドクスの解釈に関わるのであろうか。つまり、私は、このような態度が(a)～(c)で示される知に対する強力な臆見に基づいているとすれば、探求のパラドクスとは、その臆見を正当化しようというもくろみでメノンから述べられたものなのだ、ということを主張したいのである。メノンは、ソクラテスの論駁に追い詰められたすえ、争論術の論理に依拠し、(a)～(c)が相互に正当化しあう図式で示される、知そのものへの根本的な臆見を正当化し、ソクラテスの論駁に抵抗しようとはかったのである。

メノンのパラドクスは、問いのかたちで述べられるが、その裏には、(1)ソクラテスに向けられた疑念と、(2)メノン自身を正当化しようとする意図の二重の反語を含んでいる。そして、その両者が知への臆見を正当化しようという意図に結びついているのである。というのもそれらの反語をあらわに示せば、

(1)ソクラテスは徳について自分は知らないといっているが、それは嘘であり本当は知っているのだ。

(2)メノン自身は知らないものと同じようにされてしまったが（cf. 80d2～3）、それはソクラテスの魔術的言論のせいであり、本当は知っているのだ。

となるが、これら二つのメノンの真意は、(1)は、ソクラテスもまた知への臆見を利用し、知っていて自分を翻弄しているのではないかという疑いであり、(2)は、言語化の不能を指摘されてしまったメノンが知っているという思いをそのまま正当化しようとしていると解せるからである（前出の(c)で行き詰まったメノンの(b)への固執）。

メノンがパラドクスで反語的に表現したものは、(a)＝(b)＝(c)の相互正当化、すなわち、知そのものへの臆見を放棄してしまえばそれ以上探求や問答はできないというメノンの臆断であり、メノンは、問いのかたちでそれを表現し、ソクラテスにもその臆断への追従を求めているのである。[12]

そこで、メノンのversionがこのような含みをもつとすれば、それを受けたソクラテスのversionはどのような意味でだされたのであろうか。ソクラテスのversionには明らかな変形がある。それは「知者は探求しない」というS1の部分の付加である。ソクラテスはこの部分を、メノンの反語的意図を明らかにするためわざわざ付け加えたのだ、と私は解釈したい。しかし、両方のversonには相違はないと考え、パラドクスを「無知者は探求も、対象の同定もできない」という意味だけにしぼる大方の見解に対しその理由を述べなくてはならないだろう。[13]

たしかに、メノンのパラドクスの主眼は、一見、あらかじめなんらかの知を所有していなければ探求の対象の同定はできないだろう

ということにあるようにもとれる。ホワイトの解釈の線もその知を不完全記述として立論したものである。しかし、「知者は探求しない」というソクラテスによって付加されたS1は、ソクラテスがメノンのいわんと欲することを代弁したものとして述べられていることに注意するべきである（boulei legein 80e1）。ここからわかるのは、メノンのパラドクスには、すでに「知者は探求しない」という論理が含まれていたのだ、ということである。そして、ソクラテスが争論術を名指してメノンを代弁した自分のversionを述べ、メノンも難なくこれを受け入れているのを見れば、そもそもメノンのversionから、その真意は争論術の論理を語ることにあったのだとするのが自然であろう。

この解釈とは逆に、M1、M2とS2の共通点を強調し、両者のパラドクスの意味がおおざっぱにいって「無知者は探求しない」という意味につきると考えれば、ソクラテスで代弁されているS1の部分をどうとったらよいのか不可解である。仮にホワイト流に解釈すれば、「知者は探求しない」という部分は、目でそれを見るように完全に探求の対象をとらえてしまっていれば探求の必要は生じない、という意味で解釈できるかもしれない。これは、面識による知の与えられた状態であり、目撃知的な場面であろう。しかしやはり、このように解釈できたにせよ、なぜこれをソクラテスがメノンの意図として述べたのかが説明できず、メノンがこのことにふれる必然性もみあたらない。[14]

したがって、有効なのは、メノンのパラドクスは知そのものへの臆見への執着をメノンが反語的に表現したものであり、ソクラテスはそれをそのまま裏返してみせたのだ、とする解釈であろう。ソクラテスの付加した「知者は探求しない」という部分は「知っている」という内的確信を絶対化し、言語領域との遮断を行い、問答を放棄しようとしているメノンの思いをソクラテスが暴露したものである。わかりやすく示すと、メノンのversionが意味するのは、

(1)知らないものは知らない（知りようがない）

ということだが、反語的に

(2)知っているものは（言語領域とは無関係に）知っているのだ

ということを主張しており、争論術の論理である。ソクラテスは自分のversionで意図的に(1)と(2)を並置し、メノンの隠れた思いを白日のもとに晒しているのである。

ここで、パラドクスのもつ意味が明確になったとし、ホワイトの想起説の解釈についても批判を加えておくとしよう。ホワイトは、探求についての自らの定式にしたがって、探求者には不完全記述が必要であると考え、プラトンの想起説は探求者にそのような知を供給するものとして考え出されたとみている。しかし、彼のこの定式それ自体が、プラトンがパラドクスの提起とその解決で破壊を意図した古い基盤、すなわち前出の(1)と(2)の論理的背馳関係に基づいて組み立てられている、と私には思える。まさに、それが理由となって、探求は不確定性を免れないものとなり、想起も同様の不確定性をもつ、とされなければならないのである。不確定性の原因は、論理的背馳関係を越えたS（specification）がなくてはならぬという要求である。しかしプラトンはそのようなSを担ぎ出すために想起説を導入したのではないのである。また、Ⅱでみたように、パラド

クスの導入状況にＰＤとＳＷを不法に占拠する争論術への対抗ということがあるとすれば、いずれにせよホワイトの解釈の線は維持できないものとなろう。なぜなら、ホワイトは「対象ｘについて無知であるひとがｘについて正しいＳを所有しうるか」と問題を設定しているが、プラトン自身がパラドクスの導入状況で設定しているのは「対象ｘについて知っていると臆断している人が実は臆見をもっているに過ぎないことは示しうるか」という問題だからである。[15] 争論術の論理では「知っている」と主張する人は誰であれ正当化を受けてしまう危険性を残した。そこで、プラトンの課題は、臆見を所有するものの立場から、どのように臆見と知識の相違について語ることができるか、ということにおかれたのである。

そうなると、次に問題となるのは、プラトンが想起説であらたに導入したもの、つまり「古い基盤」にかわるのは、いったいどのような基盤であるか、ということになるだろう。想起説の全体的な解釈については、『パイドン』篇を無視することはできない。したがってここでは『メノン』篇で想起説が関わりをもつ、パラドクスを解消するものとしての想起説の意味についてしか私は述べることができない。しかし、プラトンは『メノン』篇ではじめて想起説を導入していることを思うとき、ここでそれが持つ意味は、想起説に我々が接近しうるその道について何かを語っているであろう。

そこで、まず第一にいわねばならないことは、想起説がパラドクスに対して有効であるのは、想起説がメノンに固着していた知そのものへの臆見を取り除き、知と無知の論理的背馳関係にとらわれない視座を開くことによりメノンの知についての構えを全体的に揺るがし、新たな知の可能性を与えているからなのだ、ということである。想起説は、まずミュートスによって、忘れてしまっていることを思い出すこともあるという指摘を行う。すなわち、

①（本来）知っていることを知らない

という想起の経験に訴えて、メノンの目を知への臆見、つまりそこには内的確信がなくてはならぬという執着から引き離し、同時に、

②知らないことを知っている

という不知を知ることの可能性へと導いていくのである。アポリアーに陥っているメノンにとっては、②は現状の思いと結びついており、それによってはじめて①→②という移行も説得的になる。想起を正当化不要の完全な知識の存在を保証したものとしかみない解釈は、②が媒介となり、①も説得的になっているという点を見落としている。この点を見落としてしまうと、プラトンがこの対話篇のなかで、パラドクスを提起し、それを想起説で解決し、メノンと同じ臆見をもつものの立場に身をおきながら知識の可能性について語ることをめざしていることに気づかないだろう。対話篇そのものはアポリアーの様相を呈していながらも、ソクラテスが「知識と臆見は異なっている」（98b2）ことを知っていることのひとつだということができたのは、知識への可能性がパラドクスの解決、すなわち想起の中に内蔵されているからであって、知識がてもとに与えられたからではないのである。

さらにもうひとつ、想起説がメノンにとって説得的である理由を述べ、『メノン』篇での想起の性格を明らかにしておこう。パラドクスは、その導入状況でＰＤとＳＷの相互補完性に関わりをもって

いた。ここからメノンは、ＰＤとＳＷの要求を同時に充たすには自分の内的確信に固執する以外にはないと臆断し、パラドクスの裏面に争論術の論理をしのびこませたのである。想起説がメノンにとって説得的であるのは、想起説は、メノンのうちの不知の知が知識の獲得に連動することを告げるものであり、「自分で自分の内に再び知識を把握し直すこと」（85d6）としてＰＤとＳＷの要求を同時に充たすものだったからである。ここからもわかるとおり、プラトンは、自分のうちに同一のエイドスを求めつつ知識を発見しようとする場合の不可避の落とし穴として、パラドクスを提起し、その解決を示したのである。

注

（1）N.P. White; (1) Inquiry, *Review of Metaphysics* 28（1974）, pp.289～310. (2) *Plato on Knowledge and Reality*, Indianapolis, 1976. pp.35～61. ここではおもに(1)を用いたが、論点の相違はあまりない。

（2）specificationは普通「特徴づけ」とでも訳すべきだろうが、「不完全記述」と訳してみた。Whiteがこの言葉を用いるのは、それが、固有のx（uniquely x）を指定するのに十分な情報ではなく、不完全であるということに強調点がある。

（3）White (1), p.302.

（4）H.H. Benson; Meno, the Slave Boy and the Elenchos, *Phronesis* 35（1990）, p.141.

（5）cf. *Meno*, 85c9～d1. とくに、epistēsetai という未来形。

（6）Priority of Definitionについては、"Socratic Fallacy" とした Geach 以来（P.T. Geach; Plato's Euthyphro, An Analysis and Commentary, *Monist* 50（1966）, pp.369～382.）、その性格および、それはソクラテス的方法か、それともプラトン哲学の一部かといった点で議論が続けられている。しかし、ことに『メノン』篇で、この問いは、パラドクス、想起説の導入の動機づけとして重要な意味を持つ。例えばVlastosは、ここでのＰＤの導入と想起説でのその解決は、初期対話篇とは一線を画するものであり、この時期での数学の公理的方法のプラトンへの影響を明示しているという（G. Vlastos; Elencus and Mathematics: A Turning Point in Plato's Philosophical Development, *American Journal of Philology* 109（1988）, pp.362～396.）。しかしBensonはこれに反対し、初期対話篇での方法の敷衍としてＰＤをとらえている（cf. Benson, op. cit. pp.150ff.）。この点に関しては、私の考えはBensonおよびNehamasに近い（A. Nehamas; Meno's Paradox and Socrates as a Teacher, *Oxford Studies in Ancient Philosophy*（1986）, pp.275～316.）。

（7）cf. G. Vlastos; The Socratic Elencus, *Oxford Studies in Ancient Philosophy*（1983）, p.36, Benson, op. cit. p.143.

（8）White(1), p.293.

（9）「答え手にとって何であるか」という表現はあるいは誤解を招くかもしれない。私のいいたいのは、答え手の意図や内的確信が問われているものということではなく、答え手が真として自分の答えを述べるというそのことが、問われていることでも

あるのだ、ということである。

(10) R.S. Bluck: *Plato's Meno*, Cambridge, 1961, pp.209～213.

(11) この言葉は中畑正志氏による（「イデアの知への道標」『古代哲学研究』十六号（一九八四年）、十九頁。しかし、私の立場は、修正された同氏の後の論稿（「プラトンにおける知識とドクサ」『理想』六三三号（一九八六年））に近い。

(12) このことはパラドクスがシリアスなものではない、ということを意味しない。なぜなら知への臆見に縛られたものにとってのみ、探求は全く不可能になるからである。

(13) 諸家（White, Benson, Nehamas ら）は、ソクラテスとメノンの version に違いを認めない解釈で大勢をしめる。それは両者の違いを主張する J. Moravcsik らが、ソクラテスの version での parapan の欠如を理由に、ソクラテスは、パラドクスが当てはまらないある知（アプリオリな知識）を想起される知としてメノンの version に入らないと考えている、と解釈しているためである。もし Moravcsic のように考えれば、パラドクスは意味を弱められたものになる。私は Moravcsic とは異なる理由で違いを指摘したい。（cf. J. Moravcsik:Learning as Recollection,in *Plato* Ⅰ, ed. by G. Vlastos, New York, 1971, pp.53～69.）想起される知をアプリオリな知だけに限定する解釈（Vlastos, M.S. Brown, Ross, Gully）は、召使いの子による実験の解釈をつうじて批判されねばならない。なお White (2), pp.59, n. 35. を参照。

(14) 小池澄夫氏は、パラドクスの解釈に必要なものは「〈知〉への方向を内包するもの、つまり、移行・運動のカテゴリーでなければならない」と正しく指摘している（小池澄夫「想起説の導入状況―『メノン』篇の場合」『古代哲学研究』九号（一九七七年）、十二頁～二〇頁）。小池氏によれば、S1は争論的意図を含み、「知らなければ探求の必要がある」ということの裏返しである。それゆえS1は「内閉された〈知への〉衝動」であり、基底にある探求のエロスを仄示するものであるとされている。小池氏がメノンの version の裏にS1が潜勢していたことを認めているのは同感であるが、争論的意図は、むしろ「論理」としてS1、S2の全体を覆うものではないだろうか。そうすると小池氏のいう知への衝動は、メノンのもっている臆見への不当な執着であると解釈できないだろうか。

(15) この対話者があらかじめもっている臆見は、「善いこと」に関してもっとも顕著であり、取り除くことが難しい。cf. *Meno*, 77b2～79e4.ここにみられるのは phainomenon agaton の問題である。cf.G. Santas: The Socratic Paradox, *Philosophical Review* 73 (1964), pp.147～64.

付記：プラトンの引用訳文は岩波版『プラトン全集』によった（一部改変）。記して謝意を表わす。

（うえだ・とおる　筑波大学大学院哲学・思想研究科）